

CHANNEL

2009
Vol.9-2
28号

「チャンネル」とは、情報などが流れる経路、道筋のこと。この冊子が、情報科の先生と教科に関する情報を結ぶ架け橋になればと願っています。

開隆堂

開隆堂のWebページにアクセスして下さい。 URL <http://www.kairyudo.co.jp>

Forefront Topics 情報通信技術の先端から

スーパーコンピュータ 地球シミュレータが更新！

—地球規模の気候変動・地球内部変動メカニズムなどのさらなる解明へ—

地球環境変動や海洋科学などの研究開発を行っている独立行政法人海洋研究開発機構は、2002年3月にスーパーコンピュータ「地球シミュレータ(ES)」を設置した。

運用開始以来、約2年半の間、世界最速を誇り、地球科学ならびに計算科学技術の発展に目覚ましい貢献をしてきた「地球シミュレータ(ES)」を、2009年3月更新し、アプリケーション実行性能が約2倍になることを目標とした新システム「地球シミュレータ(ES2)」を導入した。

「地球シミュレータ(ES2)」は、160台のスーパーコンピュータ(旧システムは640台)から構成されており、理論演算性能は131TFLOPS(テラフロップス：1秒間に1兆回の浮動少数点計算、旧システムの3.2倍)、LINPACKベンチマークの演算性能は110TFLOPSを超え、スーパーコンピュータの世界ランキングである「TOP500」では、2009年6月の新ランキング発表で日本1位、世界でも20位前後が予想される高速な計算機システムである。

「地球シミュレータ(ES2)」の導入により、環境変動に伴う現象の解明や将来予測、地球規模の環境問題の解決や地殻変動・地震発生機構等の解明など、旧システムや他のシステムでは実効困難な先進的研究分野での数値シミュレーションを高速、高精度で行なう事が可能となる。これまでも、全球の大気・大気水分の循環、海流運動の詳細な構造と海水面温度の時間変動、日本の天候に影響を及ぼすインド洋ダイポールモード現象や太平洋赤道域のエルニーニョ現象の発生の予測など、気象や気候変動・地球環境の予測の発展に寄与しており、さらなる成果を期待する。

また、旧システムを用いて2100年までの温暖化予測(大気・海洋気候シミュレーション)をした成果で多大に貢献し、2007年にノーベル平和賞を受賞したIPCC：気候変動に関する政府間パネル(地球温暖化に関する



国内最速の計算性能を持つ地球シミュレータ(ES2)

最新の知見の評価等を行う機関)の第5次評価報告書に寄与するため、各種シミュレーション実行の主力計算機システムとして期待されている。

独立行政法人海洋研究開発機構 地球シミュレータセンター
情報システム部 システム技術グループ 浅野 俊幸
参考：地球シミュレータ
<http://www.jamstec.go.jp/es/jp/index.html>

●目次

Forefront Topics	
新しくなった地球シミュレータ	1
情報の眼	
学習指導要領の改訂にみられる情報科教育の新しいステージ	
—文理融合の情報学教育へ—	2
実践Report	
高大連携によるプログラミング学習	
—北海道情報大学との連携実践—	4
開隆堂 新版「情報」教科書のご案内	6
研究会紹介	
千葉県高等学校教育研究会情報教育部会	8

学習指導要領の改訂にみられる 情報科教育の新しいステージ —文理融合の情報学教育へ—

滋賀大学 教授 松原 伸一

1. はじめに

教科「情報」は2003年度から年次進行により実施され、既に6年が経過している。一方、中央教育審議会では、その下にある各専門部会が開催されたが、筆者もその委員として加わり、教科等の内容について審議・検討する機会を得た。その後、中教審答申(2008年1月17日)、高等学校学習指導要領案の公表(2008年12月22日)、高等学校学習指導要領の改訂・告示(2009年3月9日)と進展し、小学校及び中学校だけでなく高等学校の教育課程に対してもその関心が日々高まってきている。

そこで本稿では、学習指導要領の改訂における特徴的な点を取り上げて考察することで、文理融合の情報学をベースにした情報科教育の新しいステージについて意見を述べたい。

2. 新学習指導要領にみられる特徴的な点

2.1 科目の順序

現行の学習指導要領¹⁾では、第2章第10節第2款において、第1の科目として「情報A」、第2の科目として「情報B」、第3の科目として「情報C」が位置付けられ、情報教育の目標の観点の順序に合致している。しかし、新学習指導要領では、第1科目は「社会と情報」、第2科目は「情報の科学」と表記され、情報教育の目標の観点と比較すると、順序にねじれが生じている(表1)。このことは、「社会と情報」が「情報の科学」に優先する論拠として人文社会系の情報学が注目されることにつながる。

表1 科目の掲載順序

※	現行	改訂
①	第1: 情報A	(なし)
②	第2: 情報B	第2: 情報の科学
③	第3: 情報C	第1: 社会と情報

※情報教育の目標の観点で、①は情報活用の実践力、②は情報の科学的な理解、③は情報社会に参画する態度である。

2.2 科目の名称

現行の科目名(情報A、情報B、情報C)から改訂の科目名(社会と情報、情報の科学)までの名称の変遷に

ついて推察の一例を示すと次のようになる(図1)。

- ①ステップ1: まず、情報Bを“情報と科学”、情報Cを“情報と社会”というキーワードで設定する。
- ②ステップ2: 科学と情報の2語を「と」で結ぶと、科学をキーワードとする理科と競合する恐れがあるので、科学を限定する意味で情報を修飾語とするために、「と」を「の」に変更する。
- ③ステップ3: 混乱を避けるために、「情報の…」と「情報と…」という類似性を回避するとともに、社会を重視するという観点から、情報と社会を入れ替える。
- ④ステップ4: 社会というキーワードを持つ科目を優先させるために、科目名の順序を変更する。

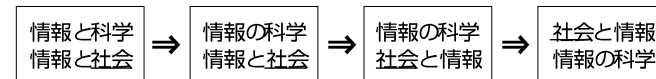


図1 科目の名称(変化の例)

2.3 科目の減少

新学習指導要領では、現行の「情報A」に対応する新科目が設定されていないことから、結果として2科目の構成となり1科目の減少となっている。専門教科「情報」が、現行の11科目から13科目の構成となり、結果として2科目の増加となっていることと比較すれば、対照的といえる。

その理由として、(1)当初の「情報A」の役割が達成されたことに加え、(2)「情報A」で重点とされる「情報活用の実践力」が他の2観点の達成に併せて段階的に織り込まれたことをあげることができる。

理由(1)については、現行の各科目の性格について、高等学校学習指導要領解説 情報編の第3節「2 各科目の性格」において、「情報A」は「コンピュータや情報通信ネットワークなどの活用経験が浅い生徒でも十分履修できることを想定している。」「情報B」は「コンピュータに興味・関心を持つ生徒が履修することを想定している。」「情報C」は「情報社会やコミュニケーションに興味・関心を持つ生徒が履修することを想定している。」と記されているように、「情報A」は、新教科としての導入時において、初心者対策として設けられたことを意味し、この度の改訂に当たっては、当初の目的が達成されたものと判断されたからである。

理由(2)については、「情報活用の実践力」という観点から、「情報の科学的な理解」と「情報社会に参画する態度」の2つの観点に対して、達成段階として位置づけられたことによるもので、「情報の科学的な理解」と「情報社会に参画する態度」を縦系とすれば、「情報活用の実践力」は横系に相当する(図2)。

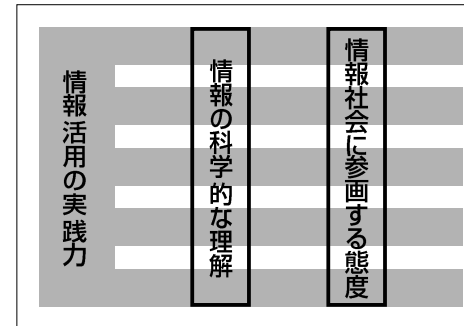


図2 情報教育の目標の観点

「情報」は、改訂後も現行と同じように、すべての生徒に履修させる共通教科であり、生徒の能力や適正、多様な興味・関心、進路希望等に応じて上記の2科目のうち1科目を必修としている。したがって各学校においては、いずれか1科目のみを設置するのではなく、両科目を開設して生徒が主体的に選択できるようにすることが望ましい。また、中教審答申には、

・生徒の多様な学習要求に応えるとともに、進路希望等を実現させたり、社会の情報化の進展に主体的に対応できる能力や態度をはぐくむために、より広く、より深く学習することを可能にする内容を重視する。

という記述があり、この点を十分踏まれば、より広く、より深く学習することを可能にするために、必修科目として1科目だけを課すのではなく、希望者には、もう一方の科目も選択して履修できるようにカリキュラムの工夫を望みたいものである。

3. 文理融合の情報学教育

3.1 情報の教員免許を取得できる大学・学部

教科「情報」の免許状を取得できる大学²⁾は、2008年4月1日現在、全国の国公私立大学を合わせて312大学に及ぶ。これは、「数学」152大学、「国語」235大学と比較しても非常に多いことがわかる。次に、情報の免許を取得できる学部等についてみれば、上記の312大学の中で、165種類の学部で情報の免許が取得でき、その総数は467にも及ぶ。特に、設置の多い学部(10以上)は、

工、経営、教育、理、経済、理工、経営情報、情報、商の9つの学部であり、文理融合の状況が把握できる。また、さらに、10未満の学部も含めれば、自然科学系(工、理、理工、農、…)、社会科学系(経営、経済、商、法、…)、人文科学系(教育、人文、文、…)、芸術系(芸術、芸術情報、造形、…)のようになり、教科「情報」の免許取得の幅は、多岐の学問分野に依拠していることがわかる。

3.2 文理融合の情報学教育へ

教科「情報」の免許取得は、文理融合の多岐にわたる学問分野において取得可能であり、この特徴は、他の教科を圧倒している。しかし実際には、教科「情報」を担当する教員の多くが理系出身者であることは承知の通りであり、必ずしも教育職員免許法の趣旨を生かしているとはいえない。そこで、今回の新学習指導要領では、上記の趣旨からも期待するところが大きい。すなわち、情報科教育において、文系のキーワードの1つである「社会」という概念が明確に位置付けられ、新しい科目名に使用されたり、科目の掲載順序に反映されたりしていることは前述のとおりである。

筆者は、この状況を情報科教育の新しいステージとしてとらえ、文理融合の情報学をベースに、メディア教育および情報安全教育を視野に入れた新しい情報科教育(情報学教育)を既に提案し実践を行っている³⁾⁻⁵⁾。詳しくは、参考文献等を参照されたい。

4. おわりに

情報科教育は、この度の高等学校学習指導要領の改訂により、「文理融合の情報学」という新しいステージへの足がかりを得たといえる。そして、今後展開される教育実践が、またその次の改訂を支えるものとして正に評価されれば、情報科教育は高校のみならず、学校教育全体において充実するための大きな一歩になるに違いない。

参考文献

- 1) 文部省:「高等学校学習指導要領解説 情報編」, 開隆堂, 2000. (省庁再編前の発行)
- 2) 情報の免許を取得できる大学は, 文科省のWebサイトを参照。 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin-daigaku/0802104/021.htm
- 3) 松原伸一:「これからの情報教育～情報学をベースに、メディア教育・情報安全教育を視野に～」, 中等教育資料12月号, 文部科学省教育課程課編集, pp.14-17, 2006.
- 4) 松原伸一:「学習指導要領の改訂と情報科教育の展望」, 情報処理学会, 高校教科「情報」シンポジウム, pp.9-16, 2009.
- 5) 松原伸一:「デジタル環境論」, ナカニシヤ出版, 2004.

高大連携によるプログラミング学習 —北海道情報大学との連携実践—

東京都立東村山高等学校 教諭 飯田 秀延

1. はじめに

本校では「情報A」を1年生の必修科目に、「情報B」を3年生の自由選択科目に設置し、「情報B」では40名ほどの生徒が受講している。「情報B」ではこれまで「コンピュータにおける情報の表し方や処理の仕組み」を理解させるために、プログラミングの単元において2時間または4時間程度の時間を使い、JavaScriptで簡単な計算などを行う実習や、Microsoft Visual Basicでタイマーやアニメーションなどの成果物を作成する実習などを行っていた。しかし、生徒個々の情報リテラシーやモチベーションに差がある上に、チームティーチングではなく1名のみで授業を行うため、いずれの場合においても、予め用意したプログラムを十分理解せずにコピーして用いるか、若しくは多くの時間をデバッグに費やして終わってしまうような授業に陥りがちとなり、十分な成果が得られなかった。そこで、1名の教員でチームティーチングと同等の効果を得るための工夫として、e-Learningコンテンツをプログラミング学習の授業に利用することを考えた。これにより、教員はできるだけ個別のデバッグや質問に専念できるようになり、苦手な生徒のフォローをすると同時に、能力や意欲のある生徒が退屈せずに学習が進められるのではないかと考えたのである。しかしこの場合の問題点は、このe-Learningコンテンツの質である。不十分な内容であれば生徒はすぐに飽きてしまうし、かといってこの作成にばかり時間をかけてしまえば本末転倒である。

そこで今回、北海道情報大学通信教育学部に、同校のe-Learningコンテンツを授業において使用させていただくことをお願いした。北海道情報大学通信教育学部では、プログラミングの講座として、C言語やJavaの初学者向けのe-Learningコンテンツが充実しており、一定の評価を受けていたからである[1]。協議の結果、両校の間で高大連携に関する協定を締結し、「特別科目等履修生」として受け入れて頂くこととなった。

2. 授業の展開

今回の授業では、C言語の演習である「プログラミング基礎」という講座の「単元1：プログラムと処理系」を全員に受講させた。100分(50分×2)の授業のうち、前半の15分ほどでログイン作業やGUIの簡単な説明をした後、各自画面を見ながらの作業にあたらせた(図1参照)。教員は机間巡視を行い、質問があったり、作業が止まったりしている生徒に対してアドバイスを送るなどの指導を行った。生徒には、単元の中の「実習」をすべて終わらせることをノルマとした。

実習はすべて画面の指示に従って行うことができた(図2参照)。生徒は画面をみて、必要に応じて説明を読ん

だり、教員に質問をしたりしながら、実習を行った。

なお、実習の進捗状況は、別の画面により確認することができた(図3参照)。

3. アンケートの内容と結果

実習が終了した生徒に対し、表1の30項目について「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の4通りから1つ選択する形式でアンケートを行った。そして2次元配置の分散分析の手法により、表2のような結果が得られた。



図1 説明画面例



図2 実習画面例



図3 進捗状況確認画面例

表1 アンケート項目

「普段の勉強について」	「今回の授業に関して」	
1.座って先生の話聞くのが退屈なときがある	11.大学の授業について期待していた	21.自分で予習復習をやってみようと思った
2.予習復習をすることがある	12.内容が難しすぎると思った	22.楽しみながら学習できた
3.普段の授業では積極的に取り組む方だ	13.集中して取り組むことができた	23.これ以外にも大学の授業を受けてみたい
4.普段の学校の勉強は難しいと思う	14.自分のペースで学習できた	24.高校での勉強の参考になる点があった
5.普段の授業は早く進みすぎだと思う	15.自分の操作結果をすぐに確認できた	25.高校の授業と違うな、と思った
6.先生達に授業のやり方を工夫して欲しいと思う	16.他の教科もコンピュータを使って勉強してみたい	26.大学と高校のつながりについて考えた
7.コンピュータを扱うことは苦手だ	17.学習方法に慣れるのに手間取った	27.大学の様子や雰囲気が分かった気がする
8.将来、コンピュータを扱う仕事に就いてみたい	18.自分から積極的に取り組んだ	28.大学について考えるきっかけになった
9.将来やりたいことがはっきりしている	19.自習室で勉強するのは苦手だ	29.高校生が大学の授業内容を知るのには良いことだと思う
10.大学に進学したいと思っている	20.教材の操作はやりやすかった	30.今回の教材に満足している

表2 分析結果

分析法	主な結果	考察
単純集計 (全体的な傾向)	大学の内容を知ることが良いことだという回答は9割が肯定。e-Learningの内容について、自己ペースの学習ができる、すぐに正解不正解を確認できる、高校との違いを感じたなどは8割が肯定。8割が今回の教材に満足と回答。	高校生にも好意的に受け入れられた。
クロス集計 (普段の生徒の学習姿勢と今回の取り組みと満足度の関係)	意欲的な生徒は高く評価した。	プログラミングに興味がある生徒にとって満足できる内容であった。
平均値の比較 (回答を操作のログデータで確認)	元から意欲の高い生徒の評価だけでなく、実際に取り組むことによって(内容を知って)生徒が評価した。	プログラミングに興味がない生徒も、楽しく取り組むことができた。

4. 授業の効果

今回の北海道情報大学との高大連携実践では、本校の生徒にとって、主に以下の3点に関して効果が得られたものと考えられる。

①学習面での効果

プログラミングの授業において、ほとんど予備知識のない初学者に対しても、楽しんで行えるような効果的な授業ができた。特に教員が生徒のフォローに専念しやすいため、つまづいた生徒に対してすぐに対応できると同時に、できる生徒がどんどん先へ進むことができ、全体的に満足度の高い授業を行なうことができたものと考えられる。

②進路指導面での効果

今回使用した「プログラミング基礎」やその他の様々なコンテンツをみて、本物の大学の授業を3体験することにより、生徒の大学に対する意識が変化したり、自分の進路を考えたりするきっかけにもなった。

③その他の効果

今回の授業は100分で設定したため、あくまで内容としては「プログラミングの楽しさ」に主眼を置き、レベル的にも「プログラミングの雰囲気」を味わう程度に留めた。そのため、この授業のみでは到底プログラミングの十分なスキルを習得することはできない。しかし元々使用しているコンテンツがe-Learning用であるため、引き続き学習をしたい生徒は、放課後や自宅などで自学自習をすることが容易であった。

5. 今後の課題

今回は本校にとって初めての高大連携であったため、テーマを「プログラミング学習」に絞り、期間も短期間で授業に導入した。高大連携という様々な形態があるが、今回のようにe-Learningコンテンツを「プログラミ

ング学習」の授業に導入することは、特に少人数の教員で指導しなければならないような場面で効果があると考えられる。そこで来年度以降は今回の内容に加えて、以下のような点に考慮したいと考えている。

- ・高校生にとってe-Learningコンテンツは目新しいため、当初は興味を持って取り組むことができるが、2週間以上に渡るような場合には、「プログラミング」に興味の無い生徒に対してモチベーションを保つのは難しい。何らかの工夫が必要である。
- ・一方、学習意欲の高い生徒に対しては、大学の正規の授業内容を履修して試験に合格した場合に、本大学に入学した際の単位として認められる仕組みを整えたい。
- ・また、情報科だけでなく、他教科でも使えるところは積極的に利用していきたい。

高大連携というと出前授業や体験授業のようなものが多いが、今回のようなe-Learningコンテンツを使ったものであれば、遠距離での連携もしやすくなるし、生徒の負担も少ない上、授業にも採り入れられて一石二鳥である。生徒が実際の大学を肌で感じるができないというデメリットもあるが、改善を加えながら、選択肢の一つとして引き続きこの形態での高大連携を行っていきたいと考えている。

謝辞


今回の授業実践およびアンケート結果の分析に全面的にご協力いただいた北海道情報大学の関係者の方々に深く感謝します。

参考

[1] 第4回 日本e-Learning大賞 総務大臣賞 「e-Learning演習環境 PETA2によるプログラム言語教育の効果的実践」

開隆堂 新版「情報」教科書のご案内

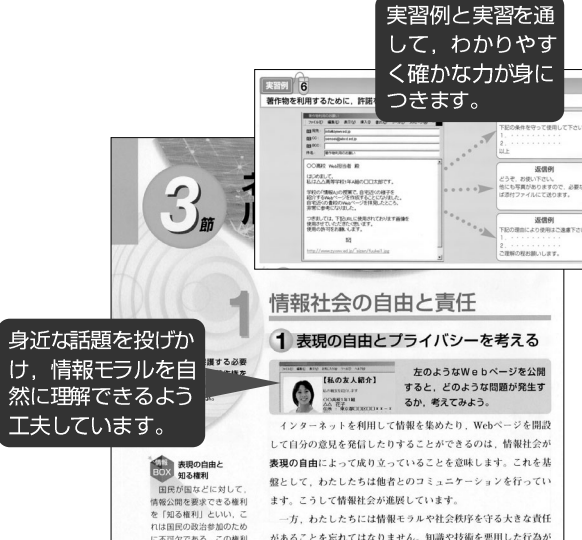
新版 情報A 情報の活用と実践



第1章 情報社会に生きるわたしたち
第2章 情報を活用するための工夫
第3章 情報の収集と共有
第4章 マルチメディアによる表現
第5章 情報機器の発達と生活の変化

B5判：174頁
(本文160頁、口絵・見返し14頁)

- ① 中高の連携を図った内容
中学校「技術分野」教科書を発行する開隆堂は中高の連携を大切に考え、中学校での学習から高校での学習へスムーズに入れるように工夫しました。
- ② 豊富で取り組みやすい実習
手立てが明確な実習を通して、情報活用の実践力を無理なく身につけることができます。
- ③ 確実に身につく情報活用能力
学習内容を生かして取り組む「総合実習」を掲載。総合実習を通して情報活用能力を確実に身につけることができます。




実習例と実習を通して、わかりやすく確かな力が身につきます。

身近な話題を投げかけ、情報モラルを自然に理解できるよう工夫しています。

情報社会の自由と責任
1 表現の自由とプライバシーを考える

インターネットを利用して情報を集めたり、Webページを開設して自分の意見を発信したりすることができるのは、情報社会が表現の自由によって成り立っていることを意味します。これを基盤として、わたしたちは他者とのコミュニケーションを行っています。こうして情報社会が発展しています。一方、わたしたちは情報モラルや社会秩序を守る大きな責任があることを忘れてはなりません。知覚や技術を悪用した行為が許されないことはもちろんのこと、虚偽や反社会的な内容の発信

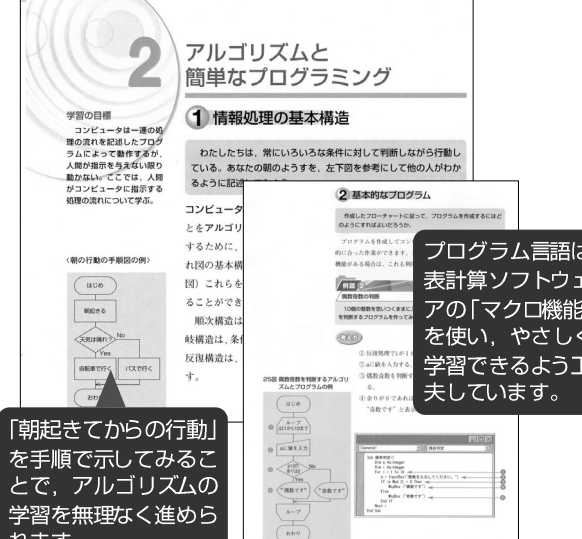
新版 情報B 情報の科学的な理解



第1章 情報社会とコンピュータ
第2章 コンピュータのしくみと働き
第3章 問題のモデル化とコンピュータの活用
第4章 情報の蓄積・管理とデータベース
第5章 情報技術の進展と社会への影響

B5判：174頁
(本文160頁、口絵・見返し14頁)

- ① わかりやすく身につく科学的な視点
情報Bの特徴である「情報の科学的な見方・考え方」が身近な話題や実践例を通して、無理なくわかりやすく学習できます。
- ② 丁寧に解説された「例題」、「実習例」
アルゴリズム、シミュレーション、データベースなどの内容を、「例題」、「実習例」を通して、基礎から応用へ自然な流れで学習できます。
- ③ 生徒の興味を引く豊富な題材
生徒の興味を引くことができる題材を豊富にご用意いたしました。生徒が身近に感じられる内容なので、学習意欲を喚起することができます。



2 アルゴリズムと簡単なプログラミング

1 情報処理の基本構造


わたしたちは、常にいろいろな条件に対して判断しながら行動している。あなたの朝のようすを、左回参照にして他人の行動がわかるように記述する。

コンピュータとアルゴリズムを組み合わせるために、流れの基本構造(図)を構築することができ、順次構造は、単純な流れ、条件構造は、条件分岐、反復構造は、反復処理を行います。

プログラム言語は表計算ソフトウェアの「マクロ機能」を使い、やさしく学習できるよう工夫しています。

「朝起きてからの行動」を手順で示してみることで、アルゴリズムの学習を無理なく進められます。

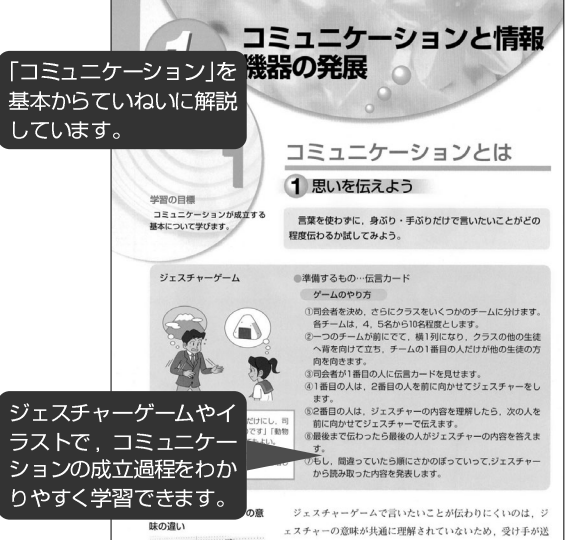
新版 情報C 情報社会を生きる



第1章 情報社会に生きるわたしたち
第2章 情報のデジタル化を探索する
第3章 コミュニケーションとネットワークを探索する
第4章 情報社会を見つめる
第5章 情報社会を創造する

B5判：174頁
(本文160頁、口絵・見返し14頁)

- ① ネットワークの基礎を平易に解説
ネットワーク技術についての基礎を幅広く、しっかりと解説。コンピュータネットワークやインターネットを支える技術を過不足なく理解できます。
- ② 確実に身につく情報活用能力
学習内容を生かして取り組む「総合実習」を掲載。総合実習を通して情報活用能力を確実に身につけることができます。
- ③ 視覚的に理解できる表現方法
Webページの作成やプレゼンテーションの構成などを詳しく解説。わかりやすく表現する方法が自然に身につきます。



1 コミュニケーションと情報機器の発展

「コミュニケーション」を基本からいぬいに解説しています。

コミュニケーションとは

1 思いを伝えよう


言葉を使わずに、身ぶり・手ぶりだけで言いたいことがどの程度伝わるか試してみよう。

ジェスチャーゲームやイラストで、コミュニケーションの成立過程をわかりやすく学習できます。

ジェスチャーゲームで言いたいことが伝わりにくいのは、ジェスチャーの意味が共通に理解されていないため、受け手が送り手と同じ意味を受け取っていないとは限らないからです。送り

新版教科書準拠
学習指導書

<情報A><情報B><情報C>
(指導計画・資料編/デジタルコンテンツ編CD-ROM)



- 指導資料を豊富に盛り込んだ「指導計画・資料編」と、すぐに役立つデータ満載の「デジタルコンテンツ編CD-ROM」のセット。
- CD-ROMには教科書の文章のテキストや図版、実習用データ、板書例など、資料が充実。
- 教科書の流れに沿った指導計画例、シラバス作成用資料のデジタルデータも収録。

充実のラインナップでトータルに

開隆堂の

情報実習のウォーミングアップ
基本操作マスターII




Word
Excel
PowerPoint
Homepage Builder
HTML
Multimedia

1 文書処理をしよう

- これ1冊で文書処理・表計算・プレゼンテーション・Web作成・マルチメディアなどの基本操作がマスターできます。
- Office2007およびWindows Vistaに対応した新版です。
- B5判128頁/780円(税込)
Office2003対応の「基本操作マスター」も引き続きお求めいただけます。

新版教科書準拠
サブノート


<情報A><情報B><情報C>



- 好評のサブノートがより使いやすくなりました。PDFデータもご用意。
- 教科書の重要語句を無理なくおさらいできる内容。章末には学習内容に沿った<テスト問題>を掲載。
- 各巻B5判96頁/690円(税込)

サポート

http://www.kairyudo.co.jp
Webページ



- 授業に役立つ内容や、研究のヒントとなる資料などを豊富に掲載。進化し続ける総合サイトです。
- サポート資料として指導案、授業実践例、リンク集など数々のデータをご用意。
- 関連教材はオンラインでご購入いただけます。

他教科との連携も重視して活動

千葉県高等学校教育研究会情報教育部会

千葉県高等学校教育研究会情報教育部会は、情報教育の部会としては歴史が古く、昭和60年に高等学校へのコンピュータ導入が始まったことから、翌61年にCAI連絡協議会としてスタートしました。その後、平成元年には千葉県高等学校教育研究会CAI部会になり、平成9年に現在の情報教育部会へと至りました。

当部会では、めまぐるしく進展する高度情報通信社会の中で、「教育の情報化」の一層の推進を目的に、特に情報教育に係る問題を中心として調査研究を行い、併せて教科「情報」の指導の在り方も含めた研究協議会・講演会を開催しております。

年間の行事は春の総会・講演会、秋の先進校見学会及び研究協議会開催です。講演会や研究協議会では大学・専門学校の先生方からのご講演や、中学校

の先生方や大学生の方達にもご参加いただくなどの活動をしています。昨年度は春の総会・講演会で神奈川県や東京都の先生方からご講演をいただき、教科「情報」を指導する上で大変勉強になるお話を伺いました。

また、本部会では他教科との連携も重視しており、研究協議会でデジタルミュージックプレーヤーの活用を取り上げた際には、英語部会にお願ひし、英語科の先生方にもご参加頂きました。

新学習指導要領も告示されましたが、当部会でも昨年度は文部科学省の視学官永井先生からご講演をいただき今後も教科「情報」について改訂の趣旨を理解し、目標を押さえた授業が展開出来るように、研究協議会や講演会を行っていきたいと考えています。

大会情報

■日本情報科教育学会 第2回全国大会

- ◆日時 2009年6月27日9時30分～17時
28日9時30分～16時30分
- ◆会場 九州工業大学・飯塚キャンパス（情報工学部）
（福岡県飯塚市川津680-4）
- ◆プログラム
＜第1日＞
 - ・一般研究発表
 - ・基調講演 岡本敏雄氏（日本情報科教育学会会長・電気通信大学大学院教授）
 - ・招待講演 椿 泰文氏（文部科学省生涯学習政策局参事官）
 - ・パネルディスカッション1
「次期教育課程における情報科教育」
- ＜第2日＞
 - ・企画セッション（ワークショップを含む）
 - ・招待講演 平林純一氏（経済産業省課長補佐）
 - ・パネルディスカッション2「情報科教育の内容と支援」
- ◆申込・参加費等
全国大会Web（<http://jaeisorg/zenko>）参照
- ◆共催 福岡県高等学校教科等研究会情報科研究部会

■第2回 全国高等学校情報教育研究大会
兼 第2回 関東都県高等学校情報教育研究会研究大会

- ◆日時 2009年8月24日10時～17時
- ◆会場 筑波学院大学
（茨城県つくば市吾妻3-1）
- ◆テーマ ICTコンパス
—あふれる情報の波を乗り越え—
- ◆内容
 - ・講演会
 - ・分科会 高等学校情報教育実践発表（研究発表・協議会）
 - ・ポスターセッション
- ◆参加資格 全国の小中高高等学校情報教育関係者、情報教育に関わる研究者、及び大学生・大学院生等
- ◆申込 全国高等学校情報教育研究会Web
（<http://www.zenko.joken.jp>）
- ◆参加費 1,000円（資料代含む）
- ◆共催 茨城県高等学校教育研究会情報部
（上記は第1次案内からの抜粋です）